

---

# 忘れてしまう前に

因幡恭一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

忘れてしまう前に

### 【Nコード】

N2891G

### 【作者名】

因幡恭一

### 【あらすじ】

どうしても過去を忘れられない少年が成長していく話

## プロローグ

「いらっしやいませー」

自動ドアが開くと同時に反射的に声を出す。このコンビニでバイトを始めて半年になる。最初の頃は戸惑っていたが、だんだんと慣れてきた。

「川島君はよく働くね〜感心感心」

僕に話しかけてきたのは、このコンビニの店長の秋本さんだ。まだ高校生の僕をアルバイトとして雇ってくれた人だ。

「ありがとうございます……頑張ります」

「そんなに緊張しなくてもいいよ〜、気楽に気楽に〜」 秋本さんはそう言いながら手をせわしなく動かしていた。その手の中には様々な色をブロックごとに分けている立方体のものがあつた。

「それって何ですか？」

すると、秋本さんがまるで未確認生物を見るように僕の顔を見た。

「ルービツクキューブ知らないの？」

「ルービツクキューブ？」

どうやら、秋本さんが持っているカラフルな立方体はルービツクキューブと言うらしい。変な名前だ。

「やっぱり川島君は変わってるわ、後でやり方を教えてあげるよ」

秋本さんは笑いながら僕に向かってそう言った。

「ただいま」

バイトを終え家に着いた。誰もいない部屋に僕の声が響く。両親は居ない。父は僕が15歳の時に病死してしまった。母は去年から体の調子が悪くなり今は入院している。いつものように僕の誕生日に父から貰った置き時計をみると10時を示していた。

「もう10時か……急がないとな」

朝には新聞配達の仕事がある。かなりのハードスケジュールだ。しかし、家族の為には我が儘を言っていられない。

僕はさっさと食事と風呂を済ませると、すぐさまベットに潜り込んだ。

ベットの中で目を閉じて昔のことを思い出していた。

僕は輝いていた。もちろん、金色に光っていたわけではない。ただ、輝いていた。

バスケットボールをゴールに入れる。たったそれだけのことなのに、僕にとっては嬉しかった。ゴールに入れば仲間が喜んでくれる。そして、みんなが拍手をくれる。

あの頃の僕には翼があった。どこまでも行ける翼が……

目を開けるとなぜか涙が止まらなくなってしまった。

忘れたと思うほどに鮮明に思い出してしまう。僕は一体どうしたらいいのだろうか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2891g/>

---

忘れてしまう前に

2010年11月16日18時47分発行